

21

住民の声、ボランティアの声 ボランティアセンターホームページ 三陸だより～現地からの声～より

県社協災害VCで開設したホームページ「明日へ進もう!!いわて」では、「三陸だより～現地からの声～」と題したコーナーで、住民の方々や、災害VCでボランティアに従事した方々の声を掲載しています。

住民からのメッセージでは、発災当時の様子や発災後の生活の状況、ボランティアに対する感謝の気持ちを紹介していただきました。

ボランティアからのメッセージでは、発災後、ボランティア活動に取り組んだ経緯や、ボランティア活動を通して感じたこと、また、被災地した沿岸市町村や住民への想いが寄せられています。

ここに、寄せられたメッセージの一部を紹介します。

【住民の声】

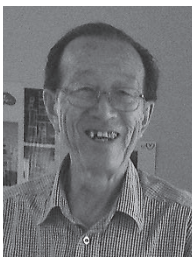
佐々木 真理子さん(釜石市)



震災後、避難所で生活する中で、遊び盛りの子どもたちは、元気が良く走り回ったりしていましたが、大人たちもストレスを感じるばかりで構ってあげられませんでした。

そんな中、ボランティアさんが来てくれ、一日中、子どもの遊び相手をしてくれたのは本当に助かりました。

復興が進む中で再び、子どもたちの笑顔を見ることができたり、最近作って頂いたビニールハウスで、人生初の農業を体験したり、最高に楽しい日々を過ごしています。本当にありがとうございます。



中島 照夫さん(宮古市)

地震直後は急いで高台へ逃げ、津波が来ないでほしいと願っていました。第一波は大変きれいな水だったことが印象的です。

その日の夜は興奮して眠れず、朝までずっとラジオを聴いていました。そのラジオでは生々しい内容が流れていたのを今でも覚えています。

発災後、避難所へは行かず、親戚の家に泊めてもら

いました。

ボランティアの皆さんがサロン活動に参加してくれると知り、わざわざ遠方から来てくれるボランティアの皆さんに何かしてあげたい、これからの希望の星に少しでもおもてなしをしたいという思いで、昨年(2011)11月からコーヒーをボランティアの皆さんへ提供しています。



佐藤 貞夫さん(陸前高田市)

昨年(2011)の9月末、ボランティアとの協力で、市内広田町に「ふれあいひろば」をオープンさせました。現在ではゲートボール場、花壇に加えて、自由に使える家庭菜園も整備しています。ボランティアは月にのべ100人以上はここに来ています。

震災当初は自らもガレキの撤去や物資の配給などを行っていました。このひろばは、ボランティアとの関わりをきっかけに、「どうなるかわからないけれど、とりあえずやってみよう」という気持ちで始めました。もともと園芸に関して詳しいわけではなかったのですが、今とても楽しいです。

ここを始めたことで、沢山のひとと知り合いました。今となつては、地元もボランティアも関係なく、誰かにとっての憩いの場になれば、それだけで十分意味があると感じています。たとえば、冬場内陸は雪深くなるだろうから、ここに来て楽しんでいったっていいと思っています。

皆さんのお陰できれいな花壇ができ、皆喜んでいます。ボランティアの方々と一緒に作業をしたり、笑ったりする中で、絆っていうのは本当に“絆”なんだと改めて実感しました。ありがとうございます。



鈴木 繁治さん(陸前高田市)

市内で温泉旅館を営んでいます。震災以降、本格的に営業を再開したのは2週間後でした。営業といっても、最初は近隣のコミュニティセンターに避難されていた300人近くの

方を対象に、無料の入浴開放を行ったものでした。

近隣の仮設で暮らしている方もよく訪れます。一度仮設に入ってしまうと、「隣は何をする人ぞ」という部分も少なからずあります。お風呂ではあまりそれが関係ない。話をしなくても見知った顔が来ると安心します。建物の被害がなかった分、だからこそ、利用してもらい、ゆっくりしてもらえればこの上ないです。

長靴・ツナギ・スコップなんてはじめて!というような方も、作業をして帰ってきた顔や洗い物を見ると、どんなことを見て考えてきたか、分かるような気がします。まだまだ先は長いですが、きれいになってきたのはそういった一人ひとりの努力の賜物。「復興」という謳い文句がある以上は、二度と被害が出ないでほしいです。



福山 貴司さん(大船渡市)

震災により、自宅1階と物置小屋が流されました。自宅は海沿いにあるので近所はもちろん、ここまで来るのかという所まで波が来ました。自分でも生きているうちにこのような体験をするとは思ってもみませんでした。

震災後は、消防団に入団していましたので避難された方々の援助等を行っていました。被災者の方々が厳しい現状とは反面、お互いに勇気づけあっていたことがすごく印象に残っています。現在も余震など度々ありますが、やはりその際はびっくりしてしまいます。

仮設住宅から改築した自宅に移動し、のんびりとした生活ができてはいますが、仮設住宅に未だ住んでいる方々に申し訳ない気持ちも少なからずあります。

今回、このような大変な思いや辛い思いをしましたので、夢という夢は特にありませんが、何事もなく普通の生活が今後できるようになればいいと思っています。

本当にボランティアの皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。全国各地から多くの方々に来ていただき、本当にありがたかったです。自分も今後、このような災害が他の地域であった際には、ボランティアに行きます。



金野 芳見さん(大船渡市)

3.11の東日本大震災から、1年9ヶ月が過ぎました。今まで経験のない地震にただ事ではないとは思いましたが、まさか何もかも全て失ってしまうとは…。

震災後、避難所で5日間過ごし(といっても車で3泊、

いとこの家で2泊)、避難所の中に入っても居場所はなく、中に居た妻も毎晩寝れない様子。このままでは2人とも参ってしまうと思い、仙台の息子のところへ行きました(といっても息子一家は嫁の実家(埼玉)に避難)。マンションの中は地震でメチャクチャな状態で2、3日して食べるものを買いに開いているスーパーに並び1人3、4品だけの割り当ての状態。

数日後、大船渡の様子が知りたくて帰ろうとしてもガソリンがなく、少しでも朝早くからガソリンスタンドに5～6時間待ちの有様。持ち合わせの金は無くなる一方でこのままでは…と思い、第2次避難所の申し込みをし、北上の水神温泉東館に移り、70日あまりお世話になり仮設住宅に入り、1年4ヶ月。今は何とか住まいを新築し、最近少しずつ落ち着きが戻ってきたと感じるようになりました。

変わりなく平凡に過ごせること、前向きに生きていくことがこれからの夢です。

ボランティアの皆さん本当にありがとうございます。ただただ、感謝の気持ちでいっぱいです。一生忘れないでしょう。仮設住宅からの引越しボランティアの人たちに手伝ってもらいました。

【ボランティアの声】



幸野 春雄さん
(和歌山県)

和歌山県から来ています。ボランティア活動をする為、軽トラックで寝泊まりできるようにコンテナを付け、被災地大槌へ入りました。

少しでも大槌の役に立てればと思い、昨年(2011)8月から12月まで活動していました。

今年も力になれたらと思い、4月から再び大槌へ戻ってきました。一旦和歌山へ帰りますが、また7月に大槌へ来る予定です。



岡本 憲明さん
(福岡県福岡市)

震災後の報道をみて「何かしなければいけない」と感じていたのですが、仕事の関係で今まで来れずにいました。長期休暇が取れたので、知人のいる仙台と釜石でボランティア活動に従事しようと思いました。

宮城県2箇所ボランティア活動後、岩手釜石に入りました。テレビの映像やニュース等で拝見したものより、実際目にしたものは凄惨さを改めて感じました。西日本では少なからず震災後風化が始まっており、震災に対しての温度差を感じました。ここで、目にしたものを地元へ帰って沢山のの人に伝えようと改めて感じました。

復興まで、長く険しい道のりになると思いますが、折れずに・そしてめげずに頑張ってください。私も微力ながら応援いたします。



竹本 美穂さん
(三重県伊勢市)

テレビなどで東日本大震災の様子を見るたびに、何かできないかとずっと思っていました。

今回私はポスティングの仕事をしていただき、仮設住宅を回るということで、ここに住んでいる皆さんは家を失くした方々なんだよなあ、と思うと、一軒一軒訪問するのがとても緊張しました。けれど、そんな気持ちとは裏腹に、皆さんは嫌な顔一つせずに熱心に耳を傾けてくださり、自分の息子さんの話や発災当時の話などをしてくれた方もいて、とても安心しました。

また、座談会にも参加させていただき、その中の一人の方が「年寄りが家で、一人でいる人が一番辛い」と話しておられたのが印象的でした。

被災地の皆さんが「今」を受け入れ、前向きに生きる姿にとても勇気をもらいました。「今」自分のしなければいけないことが何なのかを考えて、これから生きていきたいです。

この夏(2012)はとても暑いと思いますが、体には気を付けてくださいね。止まない雨はないはずです。また絶対山田に来ます。



塩田 朋陽さん(大阪府)

震災が起こり、「何かしたい」という気持ちになっていたところ、在学している大阪大学に「すずらん」という支援団体ができました。そこで、「すずらん」担当の教授に相談に行ったところ、「野田村に今度行くが一緒に行くか?」と話をいただきました。そこで、メンバー4人で来たのがスタートです。

当初来た時には、1年間野田村に住み、現地事務所

員として活動することになるとは思っていませんでした。住んでみてわかったこと、見えることがたくさんあります。昨年何度か訪問していた時とも、感じ方が違います。

救援・支援ではあるのですが、「すずらん」のメンバー、チーム北リアス(所属団体)のメンバー、活動の趣旨に賛同して募金してくれた方、応援してくれる方、そして野田村の皆さん、いろいろな方に支えられているなと感じています。

野田村の皆さんにはいろいろなことを勉強させていただき、育てていただいております。このご縁はずっと大切にしていきたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。



ブリヂストンボランティア
チーム

小野 正治さん
(栃木県那須塩原市)
友達に中越地震と
今回の地震で、自分の

軽四に寝袋と食料を積んで支援に行った人が居て、「一度日本人として見て来い」と背中を押されました。昨年は石巻で活動し、これは継続しなければと、今年(2012)から陸前高田にてボランティア活動継続中です。それなりの年なので、きつい仕事もありますが、誰かの役に立つのが楽しいです。

かなり良くなってきてはいますが、本日活動を行った高田町の旧市庁舎の周りなど、1年以上たってもまだまだの部分があり、これからも何かしら続けてやっていきたいと思います。

風化が怖いという声を聴いているので、来年も1月から来ます。元気でやってください。

毎回、皆さんの元気と笑顔を貰って帰っています。有難うございます。



鈴木 亮平さん
(大船渡市日頃市町)

以前、自分の通った学校も津波の被害に遭い、それを見たときに自分にも何かできることはないかと思い始めました。

最初は大変だったけど、やっていくにつれて少しずつ慣れてきて、今では楽しくやれていると思います。ただ単にひとつの作業をするにしても、準備をしっかり行い、作業に臨まなくてはいけないことや、作業をするにしても、ひとつとして同じものがなく、状況によってその都度

考えながら作業をしていく必要があること。また、実際に長い間ボランティアをしてきて、今まで見聞きしていたボランティアのイメージから、自分が思い描いていたものとはかなり違っていたと感ずることが多かったです。

そして、長い間ボランティアをしてきたなかで、様々な人たちと関わることもできたこともよかったです。そのなかで、大船渡市と縁もゆかりもない方たちがボランティアとして大船渡市に関わってくれたことがとても嬉しく思えました。また、実際に作業をさせていただいた依頼者と、震災時の話などをする機会もあり、何事もないように話してくれてはいますが、心のなかではたくさんの苦勞や苦悩を感じていることも感じました。

これからもできる限りボランティアに参加し、復興に向かって頑張りたいと思います。また、自分の住んでいる大船渡市だけではなく、陸前高田市や宮古市などの被災を受けた沿岸地域の復興も、できるだけ早く元の市や町の姿に戻って、震災前より賑やかになることできるように、大船渡市が復興の先駆けになるようにこれからも自分が活動を頑張っていきたいです。そして、復興した大船渡市にたくさんの人が来てくれればいいと思います。

これからは地元が進んで、復興に向かっていかなければいけないと思います。